

なのはな通信

第17号 2007.3



編集・発行
勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 石倉 啓子

第11回 卒業式

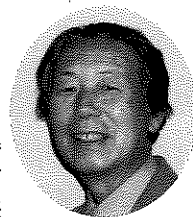
2007年3月10日



自分らしく生きる、

それを学びあう学校

校長 山田 功



ある来賓の方から「この学校の卒業式は最後の授業です。私が嬉しかったのはこの卒業式の『最後の授業』で、学生が自分たちの学びを考察し「生きること・学ぶこと・看護すること」は繋がっている、と気づき、それを決意表明の中で、明解に述べていたことでした。

「何事も一つひとつをバラバラに視るのではなく、全てが繋がっているのだと学んだ。／人はお母さんのお腹から出た瞬間から新たな人生が始まり、自分で呼吸をし、声を出し、涙を流す。人に勝つためでもなく、負けるためでもなく、自分らしく生きるために。／看護の役割の一つに、人の『生きる』を応援することがある。／この社会で生きていく限り今後も学び、人の命の平等を求めていきたい」と心を込めて、自分たちの決意を語っていました。

この卒業式の日には、実は続きがあります。涙の思いも含めて語りあう「最後のHR」が開かれたのです。ある学生は、学ぶのが辛くなり「もうだめだ」と思って、南流山駅の近くで立ち竦んでいたら、友達が私に気づいて、何も言わないでいつまでも寄り添い続けてくれた、と危機脱出のエピソードを語っていました。私が驚いたのは、ここに卒業をせず退学する仲間も一緒に出席していたことです。最後に発言を促された、その学生は一生懸命に書いてきた手紙を読み上げ、仲間へ感謝をしつつ「自分はここで退学します。でも必ずいつか看護師になります」と、リベンジの決意を語っていました。大きな拍手が起こり、これから離れ離れになっても皆「学び続ける仲間だ」という一つの心で繋がっていました。

「人間は一人ひとり、自分らしく生きる、自らの生の作者」

これは子どもの権利条約の、ある研究者の言葉です。

いよいよ新学期を迎えましたが「自分らしく生きる」ことを学ぶ、その応援を又みんなでし合う学校の春にしたいですね。

座学（全て）の学び

入学当初は聞きなれず、意味の分からなかったカタカナ単語、医学用語も1年かけてどうにか理解が出来るようになり、今では気がつく口にしていたり、人体の構造や機能を学び自分の体にどんな臓器があるのかどのような働きをしているのか考えるようになって、少し理解できるようになり授業が少し楽しくなった。

普段は何気なく学んでいる授業も実習へ行くこととても大切なことだと感じる。座学での学びが基本となり、実習で実践し一步一步看護師の道が近づいてるんだと感じた。

実習室での学び

一見、簡単そうだなと思える看護技術が実際施行してみると難しかった。

実習室ではベッドや床頭台が実際の病室だと思って使用するようにおそわった。

実習に行く前は学内演習をしてもなかなかイメージがつかめないまま取り組んでいたと思う。

実習の回数を重ねるごとに、学内演習の大切さに気づくことができた。

キャッピングの学び

キャッピングセレモニーをしたことで改めて看護師になりたいと強く思った。

入場の仕方、曲、キャンドルの点け方まで自分達で考え決意表明文も実行委員を中心に何度も作り直し、本当に良いものが出来たと思う。全員そろえることができ、1人でなくみんなで個人個人の意見を聞き入れて協力した。

決意表明文では自分たちがこれからどんな看護師を目指していくかが見え、とても良い式だった。

1年間の学び 1科12期生



実習基礎ⅠからⅢについて

緊張と不安の中、迎えた実習だったが、何よりも患者さんに学ばせていただくことがたくさんあった。

基礎Ⅰ～Ⅲまで行ってきて一番感じたことは「看護を学ぶ上での一番の先生は患者さんである」ということだった。

そして、座学で学んだことを病室で実践することの難しさや大変さを知った。

また実習は自ら学びを掴み取ることの出来る場所だと感じた。

会話をし、その中から患者さんの願いや想いをくみとっていくことの大切さを学んだ。

学内実習では決してわからなかった患者さんの気持ちをたくさん学ぶことができた。

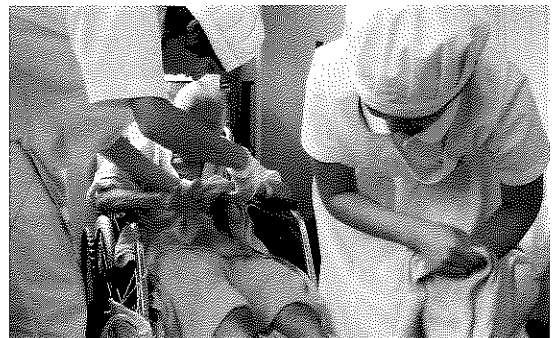
東葛祭の学び

クラス内だけではなく縦割という中で、先輩後輩との交流があり、東葛看護専門学校としての団結力を高めることができた。

助け合い支え合って素晴らしい作品を作り上げている姿に「生きる力」を学んだ。

他の学年との交流もかねてコミュニケーションをとったりそこで話しをすることは看護にも生かせるものなんじゃないかと思う。

何かをやりきることは実習、看護のチームワークにつながるものだと感じた。



体育祭の学び

日頃のストレスやプレッシャーを思いっきり吹き飛ばせた。

入学して初めてクラスで一致団結して取り組んだ。

お互いを励まし合い応援をすることによって一人一人の素顔を見ることができた。

体育祭を通して仲を深めることでみんなで頑張る喜びを分かち合い、協力し合う大切さを学んだ。

このいきおいで実習も頑張ろうと思った。

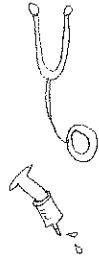
(1科12期生代表 澤山 慎吾)

涙の数だけやさしいナース満になろう！

【海と陸を繋いだ勇者「イクチオステガ」が求めた未来は…!?】

生命活動

生命活動では、人の体の仕組みを細胞レベルから学びました。遺伝子の中に生命が歩んできた進化の歴史が刻み込まれていることや個々に機能しているように見える臓器も、一つの動作を行うためには、全ての器官が連携し、生命を維持しているのだと知りました。この学びを通して人間本来の生命活動を最大限に応援していくことが看護なのだを学んだ。



地域フィールド

地域フィールドでは、各地域にわかれ、医療と労働は密接につながっていることを学んだ。自営業グループでは、働く中小企業者の規制緩和によって圧迫された労働条件の厳しい状況を学んだ。しかし、日本には中小企業が大企業を支えたりしている。それなのに働く中小企業者を国は大切にしていない所がある。けれども中小企業者の人々は負けずに連携を作って頑張っている姿がみられた。農業グループでは、農業体験を実際に行い、農家の厳しい現状を知った。現在、日本では自給率が低下し、輸入品に多く頼っている現状を知った。それぞれ

の分野に分かれて実習をしたが、最終的にはクラス全体が政治経済や社会環境に影響していることに関係していることに気付くことができた。

1科11期生

2年次の
歩み

各論実習

4つのグループに分かれて、母性・小児・精神・外科の病棟に3週間ずつ行きます。

保育学習

保育園や学童の子どもたちは、太陽をいっぱい浴びて元気よく泥だらけになり、よく遊び、よく食べる。

また、反抗的な態度をとって大人の気を引こうとする子や、お母さんの忙しさに対して家では気を遣い、いい子にしているが、学童や保育園ではストレス発散するかのように八つ当たりする様子や、お友達や先生を独占する様子もあった。

子供達は豊かな発想で遊びを工夫して、楽しんでいた。けんかをすると、先生達はすぐに口を挟まず、見守り、子どもたち同士で話し合い解決していることなどを大切にしていた。

・小児実習では、私たちに様々な患児が、病気によって本来元気である子ども達が入院することによって治療のため安静にしない姿があった。その元気な子ども達が入院して、治療するために遊びの制限をされる。そこで私たちは「なぜ安静にしないといけないのか」を患児にも分かる言葉で説明することが大切であることを実感した。

- また、小児の成長、発達に合わせての関わりが必要であると学んだ。退院後のフォローも行えるように入院中から考えていかなければならない。そのために私たちは患児の変化を観察を追って「患児」から「健康な子供」に戻れるように応援していきたい。
- ・外科実習では、手術を行う患者さんを受け持たせて頂いた。術前に患者さんの全身状態を知った上でリスクを考え、術前に必要な訓練を行っていくことが大切だと学んだ。そして、術前の観察につなげ、経過に合わせた看護や応援を行うことの大切さを学んだ。
 - ・母性実習では、妊娠・分娩・産褥・新生児とそれぞれで学び、一連した周産期看護として学ぶことができた。また、褥婦と新生児はセットで見ていくことの大切さを学んだ。分娩にも立ち合わせて頂き、新しい生命が誕生する尊さを実感することができた。
 - ・精神科実習では、実習していく中で患者さんの優しさや笑顔に支えられていると感じた。また、患者さんたちも私たちと同じような悩みや不安を抱いているということがわかった。精神科の悪しき歴史のために社会全体には今までも偏見の目が残っている。知らないことで先入観が生まれていると患者さんから学んだ。



東葛祭

e for all all for one~

one for all
all for one



今回の東葛祭のテーマである“絆”からアーチ係が、学校の顔である玄関に門を作りました。

2日目

みんなが一つになって手話で歌を歌いました。



フリーマーケットも大入りです☆★

今年はすごく天気良かったので外で出店をすることができました。☀
焼きそば、フランクフルト、みそおでんなどどれもとってもおいしく、大盛況でした。
早く行かないと売りきれぬ。



東葛祭のあとは、生徒&先生ONLYの後夜祭です☆
恒例の2人羽織や、〇×クイズ、何だろうBoxで先生もみんな一緒に大騒ぎ!!

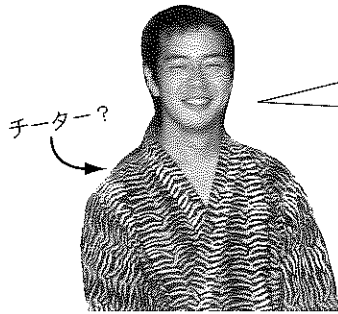


12回 東葛祭 公示

第12回

2006年10月6日・7日

～Once



チーター?

今回の東葛祭は前年よりも準備が遅く始まり、私を含め初めて実行委員となった学生が多く、段取りなど様々なことでとまどうことがありました。しかし、その都度多くの方に支えていただきました。今年度の東葛祭は、準備を進めてきた学生も来場された方と一緒に楽しむことが出来るものとなりました。

第12回東葛祭実行委員長 見獄 耕二



準備



どの人が先生かわるかな

準備の日。校長先生も生徒と一緒にたがざりつけを作りました☆

1日目

学習会では、クラス毎に実習での学びや、患者さんと一緒に行った勉強会の発表をしました。

写真は血液についてを劇で分かりやすく発表したものです。熱演…!?

現在、平和の歌姫として活躍中の形岡七恵さんも、お忙しいなか東葛祭に参加して下さいました。形岡さんの熱く素晴らしい歌声や、赤裸々に人生を語ってくださった姿にとっても感動しました。ありがとうございました。



1科10期生 1年間の学び

今振り返ると…

国家試験を終えた今、振り返ると三年間はあつという間に過ぎていったように思いますが、三年次には四月に平和と医療と日本国憲法という視点から「サイパンのもう一つの顔」を学びにサイパン、テニアン研修旅行に行きました。最大の収穫は実際に現地を見て、現地の人の話を聞くことで、それまで自分達の想像でしかなかったものをリアルに感じる事ができました。また今までに考えてもみなかったことや見たことのない世界があることにも気付かされました。この研修旅行をきっかけに新聞やニュースにも自然に関心が向くようになりました。

その後に行つた五月の成人Ⅲ実習では、二年次までの実習とは異なり、病態や患者さんを捉えることに加えて、学生それぞれが少しずつ自分の「看護観」というものを考え始めるようになっていきました。

夏を挟み、九月からの長丁場となった各論実習ではそれまで内科実習中心だったものが、外科、小児科、産婦人科、精神科の各専門領域で実習しました。全てが初めての新たな発見と学びと感動を皆で共有することが出来ました。

外科では手術を受ける患者さんを受け持ち、周手術期の看護を学びました。術前、術中、術後とめまぐるしく変化する患者さんの状態を捉えるのは大変でしたが、患者さんの身体の中では自然治癒力が働いてい



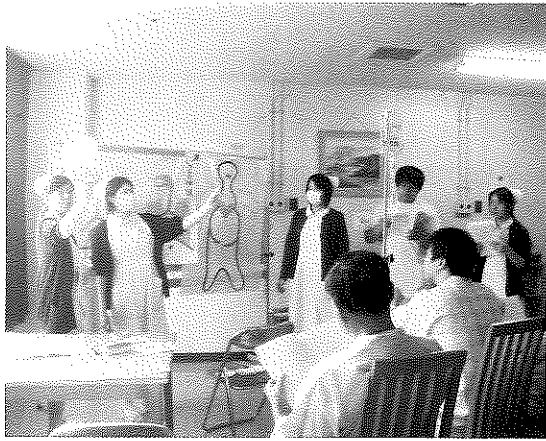
ることを学び人間の生命力にあらためて感動しました。しかし手術はリスクも伴うものであり、不安も大きく、人生で初めての経験の患者さんもあるので色々な意味での不安を受け止めることがとても大切だと学びました。

小児科では、保育所、学童へ行き、健康な子どもの成長発達を見て、ともに遊ぶ中で観察することで普段子どもに接しなかった私達は、「子どもってこんなに出来るものがたくさんあったんだ」とただ感動しました。またそれが病棟に入院している患児への成長発達へのアプローチの手がかりとなつていきました。養護学校では障害を持つ児のいきいきとした表情を見ることで元気をもらうことが出来ました。その学校では養護教諭が増えたことにより、学校に通えるようになった児が増えたということでした。「学校に行く」というごく当たり前のことができない児がこれからは安心して学校に通えるようになっていって欲しいと心

から思いました。

産婦人科では、「生命の誕生」というとても素晴らしい瞬間にほとんどの学生が立ち会うことが出来ました。妊婦検診から始まり、出産、出産後のお母さん、新生児への看護を一手に担う助産師さんの仕事ぶりに感動しました。また自分自身を振り返る機会となり、自分が生まれた時のことに興味を持つたり、小児実習と重なり、母親と父親に改めて「産んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう」と感謝の気持ちがかみ上げてきました。

精神科ではそれまで自分たちが知らず知らずのうちに抱えていた精神疾患患者さんへのイメージが大きく覆されました。精神科は内科のように目に見える病態ではなく心の領域なので実際に患者さんと接していく中で、初めはどのように接していいかわからないというときも多々ありましたが、患者さんの「病気」そのものをしっかりと学んでいくと患者さんの訴えや、症状の意味が理解できるようになっていきました。



そして、話を聞いただけで落ち着いた患者さんから本当に聞くということは大切な看護であると改めて感じました。

各論実習後から始めた三年間の学びの集大成としての卒業論文に向けて、グループや個人でまとめあげる中で三年次の学びだけではなく、三年間すべての学びが大切であり、実習、社会保障ゼミ、地域フィールド、生命活動それらすべてがつながっていくのを実感しました。卒業論文発表の後、一人ずつ三年間の学びと自分自身について振り返り、それぞれの看護観を確認しました。思いが込み上げてきて涙する人も多く、三年間頑張ってきた自分に誇りを持ちこれから臨床の場に立つことを自覚することができました。

入学してから三年間とは思えないくらい内容の濃い時間を共に過ごしてきた、時に悩み、辛くなったり、投げ出したくなったり逃げたりもしました。しかし、一人ではなく10期生皆で学び合いお互いを認め合い、腹を割って話せるようになるくらい信頼関係を築くことができました。認め合うということは、相手の良いところも悪いところも全部含めて受容出来ることだと思います。

これからこの東葛看護学校を卒業し、みなそれぞれ場所は異なるけれど、一ヶ月後には臨床の場に立つことになりました。寂しい気持ちもあるけれど、この学校で三年間学んできたことを誇りに思い、医療者としてその学びをそれぞれの場所で活かしていきたいと思えます。

(1科10期生 兼子 梢 中山 容子)

原水禁世界大会に

参加して

八月四・五・六日の三日間、広島で行われている原水禁世界大会に初めて参加させていた。だきました。

広島に行つて一番感じたことは、今でもなお被爆地を背負つていく広島県の重みが感じられました。現在の原爆ドームの後ろにはビルが立ち並び、悲惨な事実が薄れているようにも感じられました。でも、実際は広島県はいたるところに傷跡が残っています。広島にはたくさんの方の慰霊碑があり、広島市長をはじめ大人、学生たちが日々活動をしていました。広島県全体が今でも原爆の重みでいっぱいでした。

開会総会ではさびしい気持ちになりました。たくさんの方の活動を聞いていて、自分は何をやってきたのだろうと思ひ、孤独さを感じていました。そんな中、発言している方の「全面勝訴」という言葉が聞こえました。会場の人たちは立ち上がつて拍手をしていました。このときの私は、まだ意味がわからずあつげにとられていました。後に調べたところ、原爆被爆者の認定がされず六一年経つたままでも全被爆者の一％にも満たないことをしりました。そして、今回一人の方が勝訴し原爆症と認定されました。

日本は戦争、核使用はもちろんのこと、加担してはいけない。戦争の被害があつたからこそ、反対され憲法9条によって守られてきました。でも、今アメリカでは「テロや拡散の阻止」を口実とした先制攻撃と

核使用の計画を進め、被爆国の日本を出撃拠点にしようとしています。日本をアメリカとともに、戦争のできる国にしようとしています。

人間は最低の行為を行うことができず。でも、逆に言えば最高の行為を行うこともできます。

やろうとしていることが、危ないとわかればやらないのは人間の本能です。それと同様に、核、戦争は危険なことです。それを、防止するのは当たり前のことだと思ひます。

広島に行く前の私は、自分ひとりでは世界は変わらない・変えられないという考えを持って、実際に何もやらす逃げていました。でも、今は違います。そう変えさせたのは青年の集いで、立命館大学の教授安齋先生の言葉でした。『平和をつくるために、自分は何ができるのか。無力感の内なる敵である。我々が社会に働きかければ社会は変わる。微力ではあるが無力ではない』その言葉を聞いて私は恥ずかしくなりました。私にだってできることはあるはず。それは、私が身近な人に話しをするだけでもいいのです。未来

に生きる私たちは過去から学んだことを、未来に伝えることができます。

「自分の言葉・考え」で、「核兵器のない平和な世界」について、話し合い一人一人が考えることによって平和は保つことができます。一人が平和を願わなかつたら、そこで争いが起きてしまいます。だから、全ての人が平和を願ひ、人も自然も全てのものが壊されない未来になつて欲しいです。

今回広島原水禁に参加できて本当によかったです。ありがとうございました。

No more Hiroshima! No more Nagasaki!

(小野田奈緒)



患者さんの

笑顔が

見たい

看護学生の日々

三上 満 前東葛看護専門学校校長

小林 功 日本リアリズム写真集委員会



江戸川のほとりにたつ。動脈会知恵看護専門学校この学校で学んだのは、生命との一期一会かな。患者さんの元気の源になるような看護師になりたい。——学生たちは、すてきな言葉を残してこの学校から、求めている人々のベッドサイドへ集立ってゆく。看護を学ぶ人たちの、キラキラ光る涙。はしける笑い。見つめる眼差し。「学生こそ主人公」の学校、私たちの「教育基本法」が生きている学校がここにある。

最新刊 PHOTO DOCUMENT

学ぶ喜びを知った!



ぜひご購入を! ↓下記にお申し込み下さい。旗価1800円

小林 功 〒134-0013 江戸川区江戸川5-12-205 TEL-FAX 03-3689-9017
三上 満 〒171-0044 豊島区千早3-32-6 TEL-FAX 03-3959-3008

お名前 TEL
ご住所 〒 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

患者さんの
笑顔が
見たい
看護学生の日々



3年にわたって本校の学生たちを撮り続けてきた小林功さんの写真集です。主役はもちろん東葛看護と学生たち。三上前校長のエッセイもお薦めです。

2科12期生 1年間の学び



入学してから約七ヶ月が経過し一年次の総まとめとして、十一月中旬から三週間の『基礎実習』を行った。私たちにとって病棟での実習は、初めてで緊張と不安でいっぱいだった。「基礎」とは？とオリエンテーション時に聞かれ、私たちは考え「土台となるもの・基本」などが挙がった。実際に実習を始める時、患者さんから多くを学び、机上から実践への学びへとつながった。今までの学びの振り返り、さらに深く学習することとなった。実習中は、自分の受け持ち患者さんは勿論同じグループメンバーの受け持ち患者さんからも学ばせていただいた。そして、メンバー同士、情報を共有し、一緒に悩み、考えることとお互いに支え・助け合い、学びを深め、高めあうことができた。

実習中、『健康学習会』を行った。「いつでも・どこでも・誰にでも・わかるように説明できるように説明できるように」を目標とし、四月から行った『生命活動』が土台となった。基礎看護技術の一環として行った『生命活動』が実習中

に役立つとは、当初思っていなかった。目標にもある、「いつでも・どこでも・誰にでも・わかるように説明できる」ことは、看護技術で要求されることだ。

あるグループは、『腎臓の機能と働き』についておこなった。「いつでも・どこでも・誰にでも・わかるように説明できる」ために、どのようにしたらよいかを考えた。説明するためには、自分たちが十分理解していないと説明できない。どのようにしたら、わかりやすいかと考えている間に頭がこんがらがってしまうこともあった。

小道具を使用し、劇の形式で実施した。わかりやすく説明するため、そして、興味を持ってもらうために台本・パンフレットを作成した。パンフレットは、絵を活用し、文字は見やすく大きめにした。そして、内容が後で見てもわかるように、ポイントを大きく記入した。リハーサルを教員に見てもらった。

実習が終了すると、学校へ戻り劇の練習をしながら小道具を作成した。小道具で気を使ったのが、「尿の色をどう表したらわかりやすいか？」だった。私たちは、淡々黄色といわれれば「薄めの色だ」とや、茶褐色といわれれば「濃縮尿・濃い目の色」とわかるが、人によって受け取り方や、感じ方は違う。そこで、目安になる色が誰が見てもわかるように、絵の具と水を使用し、15Lの空ペットボトルに入れて患者さんの前で表すことにした。

『健康学習会』のときに、「少しユーモアもあったほうが印象付けられるのではないか？」と考え、被り物、オーバーかな？と思うほどのリアクションを加えて実施した。三十人前後の患者さんが参加してくれた。それに驚き、熱心に聞き、質問も多く驚いた。終

了後の感想や質問の中では、「劇にしてあって、わかりやすかった」とや、「おしっこが濃いつきはどうすればいいですか？」など、具体的な質問もあった。

これは、患者さんが病気に闘い、健康に対して切実な願いを持っている現われたと感じた。患者さんは、生き活きと健康で生活・労働したいと願っていると感じた。それは、私たちにも言えることだと学んだ。

健康が大きな関心となつて今日、維持・予防するための『健康学習会』として、地域に密着した保健活動も私たち医療者の役割の一つである、と改めて学ぶことができた。しかし、「誰にでもわかるように伝える」とことは、私たちにとつても難しいことだった。『生命活動』で理解していたはずが、『健康学習会』を行うことで、私たちは、基本的にさらに深く学ぶことが必要だと知った。そして、生命が対等・平等であり、健康の素晴らしさを改めて理解することができた。

ここで、ケース紹介をさせていただく。糖尿病・高血圧症があり、糖尿病合併症が進み、夫と共に二人三脚でお店を営んでいるAさんに密着した。Aさんが試験外泊を利用し、お店に出るといって何うと、活き活きと働いていた。Aさんは、以前より夫と共に他にお店を営みながら子供を育ててきた。そして、糖尿病・高血圧症になり病気に闘い治療してきた。一人で病気に闘うことは簡単なことではない。外泊より帰室後からは、退院後の生活リズムを考え、不安の言葉があった。糖尿病教育は、一回行って終わりというものではない。入院により、生活リズムを整え血糖コントロールが良好になったAさんにとつての本番は、退院してからになる。退院は、患者さんにとつても、私たちにとつてもうれしい

ことだ。入院中は、医療スタッフが常にいて患者さんをバックアップしている。しかし、退院後は自宅で生活を整えることになる。心身共に常に緊張するだろう。退院後も患者さんの頑張りや継続できるように外来での応援が不可欠である。そして、患者さんが入院により病気に向き合い、自らの生活を振り返れるように励まし・応援することも患者者にとつて必要であることを学んだ。

患者さんの深部の苦痛を深く理解し、患者さんの願いを知り、応援・サポートすることが重要になってくる。そのためには、患者さんありのままに知り、患者さんから、生活背景・生活史・病態・労働実態などを知る必要がある。患者さんは、一人一人生活背景・環境・習慣・歩んできた道・抱えている問題が違う。病態を理解することは、とても難しくなった。しかし、患者さんは健康になりたいと願い、常に病気に闘い、頑張っている。その頑張り・努力・大変さ・切実さを知り、的確な援助・アドバイス・応援・サポートをするためには、病態を理解し、看護技術を高めしていく必要がある。また、患者さんの病態や生活・労働実態を知ることによって本来の看護ができることを学んだ。

『基礎学習セミナー』で、三九人の症例を知ることができた。病名や年齢が同じでも、患者さんはみんな違い、誰一人同じではなく学びは広がった。そして、個人の学びがクラス全員に学びとなった。

この多くの学びは、患者さん・指導者さん・病院スタッフ・先生・グループメンバー・クラスの協力により得ることができた。この学びを土台にし、二年生になつても積極的に、謙虚に学びを深めていきたい。

(2科 十二期生 吉田 増美)

2科 1期のゆかいな仲間たち

私たちは この2年間を忘れずに

「ありがとう」と言われるアースを目指す！
齋藤久範!

無事2年間通って
卒業できてよかったです
陽川 貴子

とても長い2年間
資料、密着、学び
この3つの言葉を大切に
学びました！みんなありがとう
ヨッ! 山田峰子

明日は明日の風が吹く
今日を精一杯生きたい
徳生まろし

2年間本当、嬉しい
ことがあった。みんな
笑った。これほど嬉しい
下。僕もこの2年間は
絶好の思い出で、みんな
みんな本当にありがとう
ごさいます。 大田 浩
同窓会役員!!

2年間おつかれ様でした!
ありがとうございました!
西田 功子

今夜も乾杯

楽しく、悲しく、2年間でした。宮口 研 ありがとう。

沢山の人の出会いがあ
って成長することが
できました。
稲城 幸叶
嬉しい事も、悲しい事も色々あ
った2年間。ありがとうございました。
千塚 友、吉田 忠誠

アース

嬉しい事も、悲しい事も色々あ
った2年間。ありがとうございました。
千塚 友、吉田 忠誠

思いが深い
2年間にありがとうございました!
ありがとうございました!
白崎 精白

自分一人の力で卒業できた
かたに思います。アースの仲間
や先生方みんなに感謝
したいと思います。友だちのみんな
で2年間の思い出を
山内 大輔



本当に学びが深い
2年間でした。心
ざびらしい人たちと
出会って本当に
幸せです。 1538A
2年間本当にいい思い出
あった。楽しいことも
辛いことも。アースのみんな
と一緒に分け合
えて良かったよ。
本当にみんなの事が
大好きだよ! 酒井

3年生の学年にはおれんじ
に感謝。おれんじのみんな
と一緒の思い出
みんなありがとう。みんな
みんな大好きだよ!

みんなおかげで
ここまでたどり
つけたよ。めい

ありがとう。
一生の友だよ
アリス 堀野

果敢と努力、辛くもあり
人生の中で思い出に残る2年間
になりました。 田中 健

2年間ありがとうございました
みんなの思い出が
あつたよ。

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

ありのままを見て
ありのままを受け入れ
ありのままに生きて
原

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

楽しい時も、辛い時も
みんな一緒に乗り越えたよ
ありがとうございました
清原 美知子

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

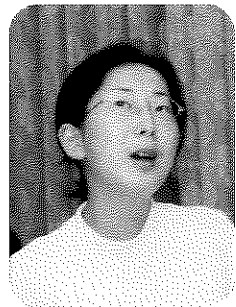
2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

2年間本当にいい思い出
があったよ。みんな
みんな大好きだよ!

よづこ先輩



梅由子 梅林美由子さん

二〇〇〇年の春に船橋二和病院に入職してから、今年で八年目を迎えます。

この八年間、同じ病院でこのまま働き続けることについて、何か不安になり考えてしまいう時もありました。けれど続けてこられたのは、私はまだ高校生だった頃から知っている職員がここにはいるからです。自分の良いところも、悪いところも知っている方々が見守っていてくれるような心地よさがあつたからだと今では思います。

卒業して一年目は腎内科に配属されました。呼吸器、糖尿病の三チームある内科の混合病棟でした。看護学校を卒業して「いざ」と学びを胸に、志高く意気揚々と現場にでたら、「あれ？」という位できない。下血している患者さんからナースコールで呼ばれたけれど、興奮している患者さんを見て動揺し、オムツ交換ができない。そこに看護学校の一期生F先輩がサツと現れて、手早く終わらせるのを「ああ、すごい」と見ていた私は学生と同じでした。その頃、何をどう工夫しても仕事が終わらない私を見かねて、何度でも何度でも多くの先輩たちがサポートしてくれました。忘れられません。そんな日々でも看護学校の存在は私の中で大きく、総合実習で昇華した私の学びはすぐに現場で活かせると思っていたけれど、現場は想像以上にめまぐるしく動き、それに振り落とされないうように

いていくのに精一杯。なかなか思い通りにいかない厳しい世界に映りました。そんな時は「できないながらも、一二〇％持つている力以上の全力を毎日出している」と研修で一緒になる同期と励まし合いながらここまでできました。

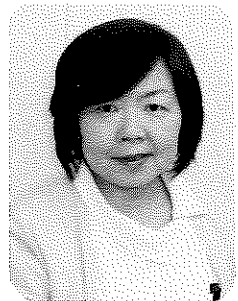
朝の朝礼に始まり、ウォーキングカンファレンス、七々八八受け持つ患者さんの検査や処置、点滴交換やライン管理など、学生の時には見えなかった看護師の仕事がたくさんありました。「看護師ってこんな事もするの？」と、よく思いました。

学生の頃は実習で患者さんに密着していたけれど、三交代変則勤務で働く看護師がどれだけ考えて仕事をして、多くの仕事や矛盾を抱え悩みながら患者に関わっているのかなんて知りませんでした。全体の仕事の流れがつかめるようになってから、患者さんの退院後の生活を考えた計画や、家族面接に取り組んでいけるようになりました。最近後輩から「無我夢中で必死に仕事をしていた時があったから今の自分がいるんじゃないですか」といわれましたが、あの頃、チームで考えて長期入院の患者さんや家族など対象に食事会やクリスマスお茶会を忙しい現場でも開いた事。今でも参加した患者さんと話しが共有できる素敵な体験があつたから今があるのだと思います。

この八年間厳しい医療情勢の中で患者さんとともに私も、サバイバルしてきたなと実感します。ままならない医療界であつても、笑顔で仕事をする事が私の今のモットーです。これからも、時が経つても変わらない、古い友人のような看護学校卒業時の初心を忘れずにいきたいと思います。

（1科3期生 梅林 美由子）

健康管理室の役割を改めて実感する



川島克江さん

事後指導の大切さ

私は、東葛病院健康管理室で勤務しています。健康管理室でどんな事をしていっているのか、私の職場を案内します。

健康管理室では、人間ドックと企業健診が主な業務ですが、職員健診や個人健診も行なっています。健診を受けた後、精密検査が必要だったり、治療が必要と思われる方への連絡にとっても苦労しています。今回は、最近健康診断を実施した、個人タクシーの運転手さんの健康診断事例を基に健康管理での、看護師業務を皆さんにご紹介します。

年齢別	40~49才 3名	50~59才 16名	60~69才 26名	70~才 7名	計 51名
項目	要精密検査	治療中	要治療		
血圧	18名	14名	2名		
聴力	21名	0名	0名		
眼底	10名	2名	0名		
肝機能	11名	1名	0名		
脂質	21名	2名	2名		
糖尿病	5名	5名	12名		
心電図	22名	0名	0名		
胸部レントゲン	5名	0名	0名		

今回の受診者は、年齢も高い方達でしたので、ある程度の予想はしていたのですが、ほとんどの人は、医療にはかかっておらず、治療中の方は、数名だけでした。診察結果が出た後、電話で精密検査の必要性や治療のお勧めをしま

したが、ほとんどの人が、「今まで、健康診断をしたって病院に行けなんて言われた事なんかはないよ」「健康診断をやったのに何故又病院に行かなくちゃ行けないの?」と迷惑そうな対応でした。しかし、今回の健康診断は、運転業務の更新のための健診で今後の運転業務が維持できるかどうかにかかっていたので、東葛病院は遠いし、面倒くさいと言われながらも、約三週間の受診誘導で、何とか来院して頂き、付属診療所の協力で、ホルター心電図やトレッドミル・心エコー・胸部CT等の精密検査を受けて頂きました。心筋梗塞二名・心不全二名・糖尿病五名と早急な治療の必要な方が見つかり治療に結びつきました。受診に関しては、付き添って受付案内や待ち時間を少しでも、少なくなればと診察券を預かり、事前に受付をすませる等の工夫をしたり、自宅が遠い方には、紹介状を書いて頂き、何とか治療に結びついた方もありました。

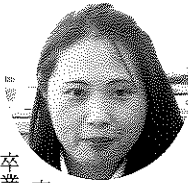
今回のタクシー運転手さんの健診を通し多くの実態を見る事ができました。TELかけをすると、一週間もたたないうちに「健診結果を捨てた」や、結果はあるが見ていない、等健康に対する意識がまだまだ低い事や高齢であるにも関わらず、睡眠時間をけずり、十、十三時間の労働をしている事、事業所では、個人の健康管理をきちんとされてなく、個人まかせで、昨年も一昨年も健康診断はされていず、事業所としては、三年間の更新手続きの為の健康診断しか実施されていない現状を知りました。

私は、今回の健診を通し、地域の健康を守る立場にある健康管理室の役割を改めて認識し、事後指導の大切さを実感しました。しかし、看護師一人では限界があり、やり切れる事が出来ません。看護師不足の中ではありませんが、何とかして看護師を複数体制にし、病気にさせない、病気を悪化させない様、一人でも多くの方に療養指導や医療への誘導をし、健康を取り戻せる様、地域住民の健康保持に役立って行きたいと思えます。

（2科3期生 川島 克江）

よろしく ごろうさま

新任・退任 教員紹介



一年間、臨床研修として現場に戻った。本校も開校後十二年を迎え現場にはどこを見ても卒業生が大勢いて、時々卒業生に「先生！」と呼ば

れながらもやさしく受け入れていただいた。十年ぶりの現場は私が思っていた以上に大きく変わっていた。学校でも学生を通してではあるが患者さんと接し、学んでいく中で医療・介護・福祉をめぐる厳しい状況の中で患者さんや奮闘しているスタッフの頑張りを感ずる日々だった。しかし、中ではもつと凄まじい事になっていた。インフォームドコンセントが叫ばれるようになって以降、書面で残すことが義務づけられたことによる記録物の多さ：研修医指定病院としてまた、度重なる診療報酬の改定に対応するための病棟再編。担当医が専門の病気別の考えから内科は急性期・慢性期と病期別に分けられ各々の役割分担がされていた。

私の配属となった6西病棟は、身体障害者加算（身障二級以上が七割以上）をとっている慢性期病棟だった。昨年四月のかつてない大幅診療報酬改悪に伴い、配属されてすぐ苦難の道が待っていた。マイナス予算でのスタートであったが、少しでもそのマイナスを少なくし地域に根ざした頼られる病院を倒産させないためにも隣の6東病棟を療養病棟から身障病棟に転換する必要に迫られた。看護師二人夜勤という条件を満たすため6西病棟も

十対一から十三対一として片三夜勤から看護師二人と介護福祉士当直の体制に変更。人事異動と業務の大幅見直しという大きな課題。システムも大きく変わり右往左往する中で、大先輩に面食らっている暇はなく、力持の主任さんやスタッフに支えられ、八月から新体制でのスタートとなった。七ヶ月がたち、ようやくゆつくりスタッフ一人ひとりと話す時間が持てるようになり個々の思いやこの数ヶ月の振り返りができ始めている。毎月の病棟会議で課題を出しつつ対策を考えてきたが介護福祉士の欠員によりシフトが組めず、体制を変更せざるをえなかったり、レクを削ることで代休消化している現状がある。二交替の職員と三交代の職員が混在する中で情報の共有や介護福祉士のやりがい追求していくことが今後の課題である。一年を振り返ると医療依存度の高い患者さんを何人もコ・メディカルスタッフと連携しつつ在宅に返したり、介護力の乏しい患者さんやターミナル期の患者さんの願いに寄り添う展開を実践してきた。積み重ねてきたものの大きさを実感している。スタッフ一人ひとりが力を結集し、大きな事故もなく、退職者もなく現在の6西病棟を作ることが出来たのだと思う。

患者さんのところで看護実践ができることを心待ちにしていた私にとって『看護師長』という職責業務は重荷：重すぎた。前任の看護師長の器の大きさをまざまざと見せつけられ、苦しい中でも教育の畑にいた私だからできることは何だろうか：を常に考えていた。目の前のことに必死だった一年間だったがこの一年間のスタッフの成長を実感するとともに『ともに育ちあう』事を改めて教わった一年でもあった。厳しい情勢の中で頑張っている患者さんとスタッフに後ろ髪を引かれつつ、四月からまた新たに学校で役割を持って前進したい。

(井上 裕紀子)



研修を終えて

去年の四月から一年間、厚生労働省看護研修センターで看護教員養成課程の研修に行っていました。研修に行く前は「目黒まで2時間通勤できるかなあ」とか「勉強ついでにけるかなあ」等沢山の不安を抱えてのスタートでした。初めの一ヶ月は家族四人の生活リズムを整えることに追われ、その後はとにかく研修課題に追われる毎日でした。研修では看護界や看護基礎教育の動向、教育についての基礎を学ぶことができました。仕事から離れ研修に集中できる時間はとても有意義であり、且つ苦しい時間でもありました。研修途中で苦しくなった時にはふつと看護学校に立ち寄り学校の空気に触れることで「自分には帰る場所がある、待っていてくれる仲間がいる」と自分自身を取り戻したものです。なんとか研修を終了できたのは看護学校で私を待っていてくれる学生たちや先生方、そして家族のおかげです。

特に息子達は一日のほとんどの時間を保育園ですごしましたが、泣き言も言わず病気もせず親孝行でした。四月からは専任教員として看護学校に戻ります。教員としてはまたまた半人前諸先生方を見習いながら自力をつけていきたいと思えます。その中で教員としての私らしさを見つけられるように頑張ります。一年間の教員研修に行かせていただき本当にありがとうございます。

(江藤ちひろ)



教員になりたての頃、見えているのは目の前の患者さんで、学生はそつちのけ。病棟でも看護方針に異議を唱

えたり、主治医にくつつかかたり、ともめたことも数知れず…。その頃を思えば、私も丸くなったなあ…と感慨もひとしおです。十二年も教員として働いていると、いつぱしことは語れるように誰でもなる。でも、思うのです。よい医療って実践してこそ言葉じゃないかと。自分は言うことは言えても実践できる力を本当に持っているのか？心配にもなります。だから研修に出ることになりました。しばらくぶりの臨床なので、ドキドキわくわく新入職員の気分を味わって、初心忘れるべからず、頑張りたいと思っています。

(1科 下 紀子)

編集後記

昨年九月二六日厚労省による本校の「運営状況に関する調査」：現地調査がありました。細々した指摘はあったものの、総評としては「皆さんが学生を大事にし教育に取り組んでいる姿勢が伝わってきた。看護教育をとおして、社会に貢献している」という素晴らしいものでした。それにしても、現地調査の受審をとおして運営上の課題が見えてきました。地域・民医連の財産でもある学校を護り、社会的にもより、コンプライアンスをもった運営をしていかなければと、気を引き締めて様々な整備に取り組んでいるところです。また、学生の学びを応援できる教員力量を向上する為の一つの取り組みとして、昨年からの指導事例検討にも取り組み始めました。他の民医連の看護学校とも学習交流をし、学びあっています。教育内容と学校運営上の課題と、今年も日頃の業務に埋没せず主体的力量を向上させていきたいと思えます。ところで、今回の「なのはな通信」は如何でしょうか？今回から学生たちに主体的に紙面を作成してもらいました。学生たちは出来上がりを楽しみにしているようです。読んでもらえる紙面作りを目指して編集委員一同奮闘していきたいと思えます。なのはな通信編集委員会

学ぶ青春

キラリ



キャッピングセレモニー 2006

小林功
モノクロ写真館



第11回卒業式 2007



地域フィールド(上・横須賀基地 下・大気汚染)

